巻 頭 言

NICUでの直接母乳育児支援

神戸市看護大学
岡　永　真由美

昨年度より，看護系学会等社会保険連合（看保連）に加盟する日本新生児看護学会と日本助産学会が協働して，「医療技術の評価・再評価に係る希望書」を検討しています．平たく言えば，「NICUで実施している手厚い直接母乳育児支援にも，保険点数請求を認めて欲しい」というための書類準備です．

保険点数請求を厚生労働省に認めてもらうためには，「有効性・安全性・普及性・技術の成熟度・医療費への影響」を記入しなければなりません．「有効性」には，エビデンスレベルを明記することが求められます．昨年度秋よりほぼ毎月委員会をもち，NICUで「どのように」直接母乳育児支援をしているのかを明文化するために，話し合いを重ねています．委員会では，一つの試みとして，エビデンスレベルを高め，技術の成熟度を証明するために，ガイドラインと，実態調査に向けて調査用紙を作成しています．

委員会のメンバーは，NICUで直接母乳育児支援を実施している看護職，IBCLC（国際認定ラクテーションコンサルタント）で活動する助産師と教員をしている助産師です．母乳育児支援の思いは同じであっても，NICUで直接母乳育児支援をするための「共通理解」に一歩でも近づく努力は欠かせません．収集した文献を読むこと，委員会で交わされる会話を聞くことで「そういうことなんだ．なるほどね．」と新鮮な気持ちで毎回の委員会に臨んでいます．

助産師であっても，はじめから「母乳育児支援」のエキスパートはいないと思います．日々のケアから経験を重ね，試行錯誤していることは，どの職種であっても同じです．例えば「吸啜反射と嚥下反射，呼吸が協調するのは34週」という知識はあっても，母子の何をどのようにみてケアに反映させるのかは，限られた経験の範囲でしか‘想像’できません．早期産で生まれた小さい赤ちゃんをどのように，安定したポジションで直接母乳支援をするのかは，臨床で日々試行錯誤されているスタッフでないと表現できないケアだと思います．

NICUで関わる直接母乳育児支援は，母親の心理状況と赤ちゃんの状態に合わせながら，産褥早期の乳房鬱積／うつ乳へのケア，乳房や乳頭の手当て，搾母乳の手技と母乳パックの運搬と保冷方法，母乳分泌維持のためのケア，直接母乳開始と継続のためのエンパワーなど，多岐にわたっていると思います．地道なケアの積み重ねが，赤ちゃんの健康と発育・発達に役立っているのです．赤ちゃんとママのために，手をかけ，目をかけ，耳を傾け，日ごろ当たり前のように実施されている一つ一つのケアにぜひ自信を持ってください．そしてそれらのケアを，学術集会や学会誌等で，「NICUでの直接母乳育児支援の技」として言語化し続けていただきたいと願っています．